

唐津氏による「楽観的論理」(ENGINEERS, No. 367, 1979年4月, 日科技連)のひとつに、「日本の貿易収支の大幅黒字に対する海外諸国の非難の中には、いいがかりとしか思えないようなものが多い。……日本のメーカーは、それでも結構うまくやっているのだから、彼らの不勉強をタナにあげて何をいっているのだという気になる。そして日本のほうが正論なのだから、よく話をすればわかってもらえるはずだという考え方をする人が多い。しかし、無邪気な思い違いである。……泥棒にも三分の理という、相手は泥棒ではないのだから、それ以上の理があると思わないと、とんでもないことになる……」がある。

ここに、この一節を借用したのは、私の心を強くうつものがあるからである。社会について一端の認識をもった心算で、学窓から社会へと巣立ったときのことである。そこでは、人間の醜悪な側面のみがやたらと目につく。口では正義正道を唱え、あるいは、組織のためという錦の御旗を掲げつつ、その実やっていることは自己の地位の確立や昇進等いわば個人の利益追求のみであると思えないことがあまりにも多い。また、培われた友情の絆も、自分の利益のためには敵履のごとく捨て去る事例も枚挙に暇がない。これらを見聞するにつけ、自分の世間の知らなさに驚き、苟立ちを覚え失望もしやる方ない心情の日々が続く。その果てに社会からの逃避は自滅につながることに気づき、他人がやらなければ、せめて自分だけでも身近かなところから世直しをやるかと立ちあがる。当然のことながら、そこでは会議等の公的場での相手の面目を傷つけたり、意見の衝突を伴う。あげくの果に周囲からは冷かな目で見られ、「君は若すぎる。大人げない。もっと大人になれ。」と忠告もされた。そのあかつきには、「あの男は潔癖すぎる。」というラベルもつけられた。「水清ければ魚住まず」の古語を思い出し、「大人げない」とは、邪悪の人間の行為もそれを許容するだけの余裕を心にも

たない行為を言うのかなと、直情径行的な自分の行動も反省もし、かつまたこの純真さこそが若者の取柄ではないかと自らを慰めもしたものである。

前掲の一節を読みながら、かつて若かりし頃の行為を思いだし、なるほどと認識を新たにしたいわけである。事実、これまで、邪悪な振舞を容認することが大人であるのだと自分に言いかかせてはきたが、何だか釈然としないものがあつた。しかし、言われるように、自分の考えや主張が正論であると思っているのと同様に、相手も自らの振舞や行為が正当であると自らに言いかせるだけの屁理屈をもってしよう。また、自分が正当と思う理屈も他から見れば、いちじるしく不完全なものであるかも知れない。とすれば、お互いの屁理屈

## 大人げがあること

角逐の場で、お互いの立場、屁理屈を理解したうえで、相互に受入れ可能な妥協点を見出す姿勢で振舞うことが、大人げある振舞であるとしてきた気持ちがある。実際、若かりし頃、他人を責めるとき、暗に自分だけは立派でありかつ完全であると思いついていた節がある。これは、思い上がりもはなはだしいことである。また、「あいつは、他人を犠牲にして自分の点数かせぎをやってけしからん。」と言う自らの心の片隅に、当人に対する一種のねたみの感情はなかつただろうか。こう考えてくると、「大人げある人間」であるためには、まず、自分をも含めて人は皆欲があること、および、自分は常に不完全な人間であることを認める勇気が必要なのである。

ところで、組織内のORが有効に機能するためには、その実践の場で、ORマンと彼らが支援する人達の間で、上述したような大人げがある振舞に心がけることが重要であるように思える。もちろん、正しい主張を曲げることは許されない。しかし、その展開の仕方、表現の方法、時期、場所柄等については、十分大人げある配慮が加えられるべきであろう。

(マグマ)